

■幸せいを科学する

心理学からわかつた」と

大石繁宏(著)

誰でも「幸せい」になりたいと思つてゐる。では「幸せい」とは一体何だらうか。

人類始まつて以来のこうした問い合わせについて論じたり、それに表現を与えてきたのは哲学者や宗教家、あるいは小説家などだつた。それを心理学の立場から、「実証的に」アプローチし明らかにしようとするのが本書の基本テーマである。文脈は異なるが、日本でも「国民総幸福(GNH)」を掲げるブータンのことがよく話題になるなど、経済成長と幸福度の関係その他についての関心が高まっている。

著者によれば、10年ほど前は「幸せい研究をしてるなんて珍しいね」と言われたが、今では「あなたも幸せい研究をしてるのね」と言われるほど、幸福というテーマが心理学における主要な話題になつてゐるといふ。戦後しばらくアメリカの心理学象とする「行動主義」が強かつたが、1980年代から感情や幸福感や愛といった主観的な概念を研究対象とすることが徐々

に認知されるようになり、過去30年で幸せいに関する実証研究が一挙に拡大した。こうした展開は、それ自体そもそも「科学」とは何かというテーマともかかわる興味深いものだ。

そのような流れを踏まえた上で、本書では「文化と幸せい」「幸せいをどう測るのか」「経済と幸福感」「結婚と幸福感」「最適な幸福度とは」等々といった、幸せいに関する様々な興味深い研究とそれを通じて明らかになつたことが、著者自身の調査を含めて包括的に提示される。

おそらく、実証的な心理学における「幸福」研究の現在と今後を把握するにおいて本書は最もものの一つと言えるだろう。

そうした本書の価値や著者の良心的な姿勢を十分強調した上で、しかし探究がなお表層にとどまつてゐるような物足りなさが残るもの事実である。また、最後の部分での「社会」や「コミュニケーション」と幸せいとのかかわりの部分をさらに発展させてほしいと思うが、それは著者自身が言うように、幸せいについての「社会科学」的検証として一層展開していくものだろう。

評・広井 良典

千葉大学教授・公政策策

新曜社・2520円／おおいし・しげひろ 93年に国際基督教大学卒業後渡米。バージニア大学准教授。

